



特集：

通信と放送の融合

The Way to Convergence of Telecommunication and Broadcasting



編集にあたって

熊谷 誠治

(株) 電通国際情報サービス 開発技術センター
kuma@isid.co.jp

ブロードバンドネットワーク接続の世帯が2,000万を超えた2005年は、「通信と放送の融合」ということばが注目された。2月にはライブドアとニッポン放送・フジテレビ、10月には楽天とTBSがそれぞれ「株式市場」を舞台にして世間を騒がせた。

過去を振り返ると、通信と放送の融合は失敗の連続だった。1996年に発売されたインターネットテレビはまったく売れず、惨憺たる状況であったし、2002年に110度CS（通信衛星）放送として登場したepという映像蓄積型サービスは、ほとんど顧客を獲得できずに撤退してしまった。1,000万台のチューナを出荷したというBS（放送衛星）デジタル放送でも電話回線をつないでいる家庭は少なく、双方向はあまり利用されていないようだ。

もちろん、放送を見て電話で注文するテレビショッピング、放送を見て携帯電話で答えるアンケートやクイズなどの成功例もある。テレビと携帯電話、あるいはテレビとパソコンの2つのスクリーン（画面）を使う手法は、ダブルスクリーンと呼ばれて通信とテレビ放送の融合策の1つとして注目されている。

世界的な動きとしては、ケーブルテレビ会社は放送事業に加えてインターネット環境を提供し、さらにIP電話へとサービスを広げている。インターネット・サービスプロバイダは、IP電話サービスを始めて、さらに映像配信をスタートしようとしている。どちらも3つのサービスを提供するのでトリプルプレーと呼ばれている。

これまで、スポーツ、コンサートなどをライブでインターネット中継していた放送局も、最近になって一部の番組のオンデマンド・インターネット配信を始めるなど、サービスの幅を広げている。通信と放送の境目があいまいになっていることは事実だ。有料 vs. 無料、ライブ中継 vs. オンデマンド配信、パソコンで視聴 vs. セットトップボックスを使ってテレビで視聴などその形態はさまざまである。それぞれが試行錯誤を重ねながら新しいビジネスを模索している。

我が家でも、地上デジタル放送チューナ内蔵のハードディスクレコーダがインターネットにつながっており、番組表をインターネットからダウンロードしたり、インターネット経由で番組予約ができる。放送の一部をパッケージ化してネット配信し、外出中にポータブル・メモリ・プレイヤーで再生するポッドキャストと呼ばれる技術も登場した。身近なところでも通信と放送は近づきつつある。

2006年4月には地上デジタル放送の電波を利用した「ワンセグ」と呼ばれる携帯電話などの移動体向けの放送も始まる。当面はサイマル放送であるため、地上デジタル放送と同一内容の番組が配信されるが、データ放送も行われ、携帯電話の通信網も利用できるのも、まさしく通信と放送が一体化した端末ということになる。

また、放送技術を取り込んだブロードバンド・ネットワークは、利用帯域を抑えるための高圧縮から開放されることによってその用途を広げている。双方向で映像伝送を行うテレビ会議や遠隔授業は、遅延を短縮し、臨場感を高めることによってその効果を大きく向上させた。

放送のデジタル化は、デジタル・データを扱うコンピュータと親和性が高いし、いち早くデジタル化を成し遂げた通信との親和性も高い。融合が語られるのは、この親和性が双方にメリットをもたらすと考えられているからである。しかし、1つに溶け合う「融合」だけが重要なわけではない。「協調」、「協業」、「活用」など、双方にメリットがあってそれぞれが別々に存在するような形があってもいいわけだ。

このような状況を背景に、今回の特集では、放送技術を取り込んだり、そのコンテンツを活用しようとする通信と、通信を利用してコストダウンやサービス向上を目指す放送という2つの面から、通信と放送を取り巻く環境と動向をまとめてみた。

(平成18年1月6日)